

「ビーチライフ創生プロジェクト省察会」が 開催されました

実施報告

日時: 12月10日(木) 17:00 ~ 19:00

場所: 東海大学湘南キャンパス 8号館3階 プロジェクト会議室

司会: 深谷浩憲(チャレンジセンター推進室)

- 内容:**
1. ビーチライフ創生プロジェクトの概略紹介
高市慎太郎(政治学科2年)
 2. プロジェクトメンバー各自の省察
 3. 講評①
石川勝(シンク・コミュニケーションズ代表取締役、東京大学 IRT 研究機構特任研究員)
 4. 講評②
杉本洋文(建築学科教授)
 5. 質疑応答

1. ビーチライフ創生プロジェクトの概略紹介

高市慎太郎(政治学科2年)

プロジェクトの目的と活動概要を説明し、「砂浜の図書館」や各種イベントの様子などを画像とともに紹介した。



2. プロジェクトメンバー各自の省察

高市慎太郎さん(政治学科1年)、森隼人さん(法律学科4年)、江成駿さん(情報数理学科1年)、松田弥花さん(北欧学科3年)、山家俊晃さん(北欧学科1年)、大久保翔太さん(建築学科2年)が、事前に用意されていた省察シート(A4用紙1~2枚)に基づいてプレゼンテーションを行った。省察シートには「1. 今回の活動は社会にとってどのような意味があったと思うか、2. 自分はどのようなことを大切にして取り組んだか、3. 今回、何に気付いたか。また、それを今後どのように生かしたいか」という3つの設問があり、それぞれに対して学生が自由記述する形式であった。



各メンバーの省察発表が終わるごとに、石川氏からコメントが示された。学生に問いかける形式が多用され、自ら考えさせることを促していたのが特徴であった。(例:「人と人をつなげる」とあったが、何のためにそうするのか。社会のためにどのように役立つのか)。また、プロジェクト活動を押し進めていく上で必要になるマネジメントやリーダーシップに関わる指摘がなされた(例:手段と目的を明確に分けることが重要。何のために、何を成し遂げたいからこそ、このような活動をしているのかを自覚するとともに、周囲に伝えなければならない)。個別的な経験から、普遍的な学びを引き出すような問いかけも行われた(例:なぜ月見会談のイベントにはあれだけ沢山のお客さんが来てくれたのだろうか。集客力のあるイベントとはどのようなものだろうか)。

3. 講評①

石川勝(シンク・コミュニケーションズ代表取締役、東京大学 IRT 研究機構特任研究員)

プランナーとしての経歴紹介と、チャレンジセンターに協力することになった経緯についての自己紹介があった。続いて、「企画とは何か」というテーマについて次のように論じた。企画とは「今ある姿(現状・課題)を望むべき姿(目的)に変えていくことであり、それを実現するための手段としてプロジェクトがある」という関係の枠組みがある。この枠組みをビーチライフ創生プロジェクトにあてはめると、今ある姿とは「秋の過ごしやすいビーチを楽しむライフスタイルが定着していないこと」、それに対する望むべき姿とは「読書などビーチの新たな楽しみ方を発見してもらおう」である。こういった関係を明確にしていくことが企画の成功および企画書作成に役立つ。プロジェクトの流れは、企画期・計画期・準備期・実施期・評価期という順序で進んでいき、各時期において順に頭(アイデアを練る)・手(企画書を書く)・口(話し合う)・足(動く)・耳(他者からの評価を聴く)が重要なポイントとなる。また、必要とされるスキルとして、社会学的教養(社会の意思を読み解く力を養おう)・工学的構成力(ものごとを立体的に捉える力を養おう)・芸術的表現力(説明するな、想像させる)・体育会系的人づき合い(仕事は他者から与えられ、評価される)・自ら楽しむ力(人生の半分は仕事の時間)の5つが挙げられる。これらの頭文字をとった「社・工・芸・体・楽」という言葉を大切にほしい。プロジェクト活動を通じて、ぜひ実践力を身につけてほしい。



4. 講評②

杉本洋文(建築学科教授)

学生の省察は「わがこと化」が不足しているのではと感じた。省察シートは、もっと自分の言葉で語ってくれるとさらに良かったと思う。具体的に、事実として、なぜそうなったのかを話してくれることを今後期待している。石川さんのプレゼンテーションは「見える化」が非常に上手いと感じた。また、プレゼンの中でも紹介されていたように、仕事を楽しむということを目指してほしい。



5. 質疑応答

Q (石川さんへ)どのようにして学生たちの企画をまとめていったのか。

A 答えを最初に与えるのではなく「なぜ」と問いつめていく。それによって、考えていないことが露呈し、そこで初めて考えるようになる。マンパワーが不足していたので、他にも良い企画がたくさんあったのだが、途中の段階で絞込みを行った。絞込みに際しては、実現可能性を中心的に考慮した。

Q (高市さんへ)「楽しんでもらいたい」という目標は当初からあったのか。

A 初めからそう考えていた。いろいろと考えなければいけない問題はたくさんあるが、いまだにその考え方は変わっていない。自分自身も楽しみたいと思っている。